

74. 妊娠および女性性器腫瘍における α -fetoprotein について

東京医科大学 産婦人科

多田 正毅 高山 雅臣 相馬 広明
近田 利啓 所 和夫 菊地 威史
同 放射線科
村山 弘泰 林 欽城 森山 昭子

妊娠および異常妊娠時の α -fetoprotein 値の変動と婦人科腫瘍における α -fetoprotein 値の測定を行った成績について述べる。

正常妊娠, 妊娠中毒症, 前置胎盤, 胞状奇胎, 胎内死亡, 無脳児, 切迫流産, その他卵巣腫瘍, 絨毛上皮腫, 子宮頸癌, 悪性メラノーム等について Radio immunoassay により, 羊水中および血清中の α -fetoprotein 値を測定した。その結果正常妊娠における母体血清 α -fetoprotein 値は妊娠3カ月までは平均 10ng/ml 以下で非妊婦血清値と有意差はなかった。その後逐月的に血清値は上昇を示し, 妊娠7カ月で急増し妊娠8, 9カ月にて最高値を示し, 妊娠10カ月でやや減少する傾向を示す。

異常妊娠例では妊娠中毒症, 前置胎盤例では正常妊娠 α -fetoprotein 値と比較して変化はなかった。無脳児例では母体血清, 羊水値の α -fetoprotein 値は異常な高値を示し, 胎内死亡例においても高値を示した。しかし全胞状奇胎例では明らかにそれに相応する正常妊娠月数 α -fetoprotein 値に比べて極めて低値を示した。流産例においても搔爬前後の α -fetoprotein 値を比較すると, 妊娠4カ月では搔爬後の α -fetoprotein 値が搔爬前より高値を示した。又3カ月以前においては高値を示さなかった。

さらに絨腫, 子宮頸癌, 卵巣腫瘍, 悪性メラノームを測定したが, いずれも低値を示した。

75. 睪丸腫瘍と α -Fetoprotein

慈恵会医科大学 泌尿器科

上田 正山 町田 豊平 三木 誠
木戸 晃 南 武

radio immunoassay による α -Fetoprotein 測定の臨床的評価は, 原発性肝癌以外の疾患にも広く認められるようになってきた。われわれは現在泌尿器系腫瘍についての意義を検討しているが, 今回は特に睪丸腫瘍について術前診断, 治療効果あるいは予後判定に如何に有用であるかを報告する。

対象症例は昭和48年以降, 当科に受診した睪丸腫瘍10例である。セミノーム4例, 胎児性癌3例, 悪性奇形腫2例, 良性奇形腫1例, 全症例に術前, 術後および経過中の α -Fetoprotein を測定し, 同時に赤沈値, CRP, 検血, 肝機能, LDH などを測定し比較した。また胸部レ線撮影, IVP なども参考して病状の進展も確めた上, α -Fetoprotein 値の変動との相関を観察した。

〔結果〕術前の α -Fetoprotein 値は, 胎児性癌はすべて異常高値をしめした。セミノーム, 奇形腫では全例が正常値内にとどまっていた。胎児性癌の2症例は除癌術直後に急激な下降を認め, ほぼ正常値に達したが, 1例は術後2カ月目から再び α -Feto 値が上昇し始めた。この再上昇例はその後約1カ月して縦隔リンパ線への転移が証明され, この部に放線治療を行ったが, 腫瘍の消退(消失ではない)はあるが α -Fetoprotein は正常値を示している。

以上の成績から, α -Fetoprotein は睪丸腫瘍の術前診断において, 胎児性癌の質的鑑別が可能なこと, 胎児性癌の転移巣の消長と α -Feto 値はほぼ平行するが, 放線治療中は必ずしも高値を示さないことが経験された。今後症例を重ねてこれらの臨床性については再検討の予定である。